

授 業 科 目 の 概 要			
(大学院学校教育研究科 教育実践高度化専攻)			
科目 区分	授業科目の名称	講 義 等 の 内 容	備 考
臨 床 共 通 科 目	教育課程の編成・実施 の実践と課題	<p>(概要)</p> <p>教育課程の編成・実施の実践と課題に関して、以下に掲げる内容を中心に、研究成果を踏まえた実践的内容の講義を行うとともに、「ケーススタディ形態」、「ワークショップ形態」、「プレプロジェクト科目形態」、「その他、上記を複合した形態」などの多様な形態を弾力的に組み合わせ、発表・質疑を取り入れた授業の展開を図る。</p> <p>前半(10回)は、全担当教員の共同方式によるオリエンテーション後、オムニバス方式によって、8名の担当教員が4グループ毎に次の授業内容を実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 学習指導要領と教育課程の編成実施 (担当：朝倉啓爾、西川 純) ○ 個に応じた指導の充実 (担当：水落芳明、岩崎 浩) ○ 指導と評価の一体化、教育課程の自己点検・自己評価 (担当：松本 修、木村吉彦、岩崎 浩) ○ 総合的な学習の時間の全体計画の内容と取扱い(各教科・道徳・特別活動との関連、学年間や学校段階間の指導との関連への配慮を含む。)など (担当：小林辰至、久保田善彦) <p>後半(20回)は、全担当教員が共同方式によってグループ別授業(グループ別討議)、全体授業(グループ発表、まとめ)を実施する。授業内容全体に関しては、授業のテーマやねらいが貫かれ、理論と実践の架橋・融合・往還を十分に担保できるよう、全担当教員が随時、連絡調整する。よって、担当教員により授業担当回数が異なることとなる。</p> <p>(オムニバス方式(10回)及び共同方式(20回)／全30回)</p> <p>(8 朝倉 啓爾／24回)</p> <p>1 学習指導要領と教育課程の編成実施(学習指導要領の成り立ち、各学校における特色ある教育課程の編成と実施)(1回×4グループ)</p> <p>教育課程の基準としての学習指導要領の成り立ちを概観するとともに、その読み解き方について論じる。また、各学校においては、学習指導要領の枠組みの中で、地域や学校の実態及び児童生徒の心身の発達段階や特性等を十分考慮して特色ある教育課程を編成・実施していることや、それらに対して外部評価が求められていることなどについて考察する。</p> <p>(3 西川 純／24回)</p> <p>1 学習指導要領と教育課程の編成実施(生涯学習や父母と地域社会と連携した教育課程編成の実際)(1回×4グループ)</p> <p>学校における教育課程を、社会人としての社会生活及び家庭生活を見据え編成することの重要性を明らかにするとともに、その方法論を論ずる。具体的には、小学校・中学校・高等学校の学校教育がその後の社会生活、家庭生活にどの程度関わるかを問うた保護者・教師を対象とした調査の概略を語り、その結果から、保護者がどのような教育課程を望んでいるかを示す。それを手がかりとして、各自が学校教育の目標を再検討する討論を行わせる。本時では、一つの目標を定めさせるのではなく、教師と父母や地域社会との間にギャップがあることを再認識する機会を与えること目的とする。</p> <p>(14 水落 芳明／24回)</p> <p>1 個に応じた指導の充実(学習者の相互関係による個別指導の実態)(1回×4グループ)</p> <p>学校教育において、個に応じた指導を充実させていくことは急務である。学校現場では、少人数指導や習熟度別指導に取り組む一方で、担当教師を加配するなどの措置が行われているが、その効果に対する疑問の声も上がっている。そこには、1人の教師が担当する学習者の数を減らすことで対応しようとすることに限界があることを示している。そこで、本講義では、情報の3階層モデルを基本とした学習環境のデザイン、即ち、学習者の最も効果的な教え手は、周りにいる学習者自身であるといった考え方に立ち、自由なコミュニケーションを保証した学習こそが、効果的な個別指導を成立させることを、学習情報の可視化といった観点から論ずる。</p>	<p>オムニバス方式</p> <p>オムニバス方式</p> <p>オムニバス方式</p>

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
臨床共通科目	(教育課程の編成・実施の実践と課題)	<p>(7 岩崎 浩/28回)</p> <p>1 個に応じた指導の充実(集団の中における個の理解)(1回×4グループ) 集団と個が記録された教時間の同一授業データ(ビデオデータ及びその筆記録)を一人の生徒を中心にその学習過程が授業という集団の営みの中でどのように成立しているかをミクロな視点で読み解いていく。特に、相互作用への参加を支えるアドバイザーとしての他者の存在、並びに、生徒同士の人間関係が相互作用に大きく影響すること。また、生徒の数学的な知り方、ないしは、対象への(数学的な)関わり方は、「発言しながら考える」という生徒の相互作用への参加の仕方に具現される、その教室独自の文化の形成過程とともに構成されること等、教室で起こっている事実についてのよりよい理解を手がかりとして、個に応じた指導の在り方について論ずる。</p> <p>2 指導と評価の一体化、教育課程の自己点検・自己評価(授業場面における指導と評価の一体化)(1回×4グループ) ベテラン教師によって展開された師範授業のデータ(ビデオデータ及びその筆記録)を対象とし、デューイの探究をひきおこす「不確定な状況」という考え方を手がかりにミクロな分析を試みる。そして、子どもの問いが授業後にも残り、さらに広がっていく授業に見られる教師の教授行為の特徴を読み解いていく。特に、教材に仕組まれた巧妙な仕掛け、「問い」と「考え方」との間の緊張関係の連続的創造、これを引き出すリスニングの技術等に注目しながら、指導と評価の一体化の在り方について論ずる。</p>	オムニバス方式
		<p>(4 松本 修/24回)</p> <p>1 指導と評価の一体化、教育課程の自己点検・自己評価(学習指導の過程における評価の意義と方法)(1回×4グループ) 学習指導の実践過程における評価は、学習者における学習の達成の状況を確認するとともに、学習デザインそのものを見直すためのフィードバックとしての意味を持っている。この学習指導の過程における評価は、テストや観察といった、学習過程とは切り離された形や学習者を疎外した形では意味をなさない。評価活動それ自身が学習と一体のものである。このような「学習に埋め込まれた評価」という観点から、指導と評価の意義を検討し、相互評価・自己評価を含む評価の方法の方向性について考察する。</p>	オムニバス方式
		<p>(5 木村 吉彦/24回)</p> <p>1 指導と評価の一体化、教育課程の自己点検・自己評価(評価観の変遷と評価と一体化した指導の在り方)(1回×4グループ) 絶対評価や個人内評価といった、子ども理解が基本となる教育評価の在り方が我が国の学校教育における課題となっている。子ども一人ひとりを見取る教師の力量やそこで見出した資質能力(広い意味の学力)の表記の仕方等、具体的な実践場面をとおして子ども理解力及び説明力のトレーニングを行う。また、子どもを見取ると同時に子どもの興味・関心や育ちの方向性を見極めながら声かけを行う「評価と指導の一体化」についても、具体的な実践場面をとおして、その在り方を分析・検討する。</p>	オムニバス方式
		<p>(2 小林 辰至/28回)</p> <p>1 総合的な学習の時間の全体計画の内容と取り扱い(環境を中心とした総合的なカリキュラム編成の実践)(1回×4グループ) 環境をテーマとした総合学習の教育課程開発の理論と実際について論ずる。具体的には、地域の自然、消費、歴史、文化、食、居住、人口など様々な要素を含め「持続可能な社会の実現のための教育・学習」という幅広い概念で環境教育を捉え、体験をとおして自ら考え行動するというプロセスを重視した多面的な学習により問題解決能力を育成する教育課程の構築について述べる。また、理科、社会、家庭科、国語、道徳など、各教科等の観点で捉えるとともに相互に関連付け、総合的な展開の必要性についてもふれる。</p> <p>2 総合的な学習の時間の全体計画の内容と取り扱い(総合学習における教育課程編成)(1回×4グループ) 総合的な学習の教育課程を開発する方法論について論ずる。具体的には、課題設定・学習展開を縦軸、学習内容の範囲(単一教科、複数教科の関連・融合、新課題)を横軸とするマトリックスに基づき、総合学習を類型化するとともに、学習目標を達成するための内容の選定の在り方について具体的事例を挙げて述べる。</p>	オムニバス方式
<p>(16 久保田善彦/24回)</p> <p>1 総合的な学習の時間の全体計画の内容と取り扱い(総合的な学習に求められる学力と形成的評価の在り方)(1回×4グループ) 総合的な学習の時間が導入されて以来、各校が独自にカリキュラムを開発している。本時は、各校が育成しようとしている学力、展開の形態、形成的評価及び総括的評価について、典型的な展開事例を取り上げそれぞれを整理する。その上で、展開方法と、求める学力や評価との関連性を論じる。また、ポートフォリオによる形成的評価の重要性を明らかにするとともに、その方法論を論ずる。</p>	オムニバス方式		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
臨床共通科目	教科等の実践的な指導方法の実践と課題	<p>(概要)</p> <p>教科等の実践的な指導方法の実践と課題に関して、以下に掲げる内容を中心に、研究成果を踏まえた実践的内容の講義を行うとともに、「ケーススタディ形態」、「ワークショップ形態」、「プレプロジェクト科目形態」、「その他、上記を複合した形態」などの多様な形態を弾力的に組み合わせ、発表・質疑を取り入れた授業の展開を図る。</p> <p>前半(10回)は、全担当教員の共同方式によるオリエンテーション後、オムニバス方式によって、6名の担当教員が4グループ毎に次の授業内容を実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 教科等の意義・目的(教科間の関連指導の工夫を含む。) (担当:久保田善彦) ○ 授業計画(学習指導案の作成) (担当:松沢要一) ○ 教材研究(教材の収集・選択・分析、教材化の工夫など) (担当:松本 修、久保田善彦、松沢要一) ○ 指導方法(授業構成・授業形態の工夫(少人数指導や習熟度別指導など、個に応じた指導等)を含む。) (担当:松本 修、水落芳明、岩崎 浩) ○ 指導と評価(テスト等の作成、評価の在り方)など (担当:水落芳明、西川 純) <p>後半(20回)は、全担当教員が共同方式によってグループ別授業(グループ別討議)、全体授業(グループ発表、まとめ)を実施する。授業内容全体に関しては、授業のテーマやねらいが貫かれ、理論と実践の架橋・融合・往還を十分に担保できるよう、全担当教員が随時、連絡調整する。よって、担当教員により授業担当回数異なることとなる。</p> <p>(オムニバス方式(10回)及び共同方式(20回)／全30回)</p> <p>(16 久保田善彦／28回)</p> <p>1 教科等の意義・目的(オーセンティックな教科学習の方法と評価の実際)(1回×4グループ)</p> <p>教科学習の意義を既存学問領域との関連から考察する。特に、オーセンティックな学習に注目する。オーセンティックな学習は、「臨在性」(物理的な本物性ともいう)と、「迫真性」(社会的関係の本物性ともいう)に分かれる。その両面から、理科教育を中心にその在り方と方法を論じる。</p> <p>2 教材研究(教材開発と連動した授業計画の必要性とその実際)(1回×4グループ)</p> <p>教材開発が教師の視点に偏ると、正しい理論や正確な情報を示すための教材になり、子どもの思考の流れとの整合性がとれなくなる。そこで、本時は、教材開発の意義を論じるとともに、開発教材の効果を高める授業(単元)計画の開発法について、子どもの固有の考えや思考を視点に論じる。また、実体験の難しい学習における、シミュレーション教材の単元への導入法について議論する。</p> <p>(13 松沢 要一／28回)</p> <p>1 授業計画(教師間の相互作用と授業観及び学習指導案)(1回×4グループ)</p> <p>教師の研修・職能開発にかかわる教師間の相互作用について、中学校数学教師の場合、「教材の準備に一緒に取り組む」を月に2、3回以上行っている割合は、わが国で56%であり、国際平均値81%を大きく下回る(TIMSS2003)。このような実態は、授業者の授業観そのものにも影響を及ぼしている。そこで、教師間の相互作用の在り方と授業観について、具体的な単元を例にしながら論じ、検討する。さらに、そのことが学習指導案にどのように影響するのかを考察する。</p> <p>2 教材研究(教材開発の視点とその実際)(1回×4グループ)</p> <p>算数・数学の勉強の楽しさについては、小学校4年生、中学校2年生とも、わが国は「強く思う」割合がそれぞれ29%、9%であり、国際平均値より20ポイント程度低い(TIMSS2003)。憂慮すべきことであり、ここに教材開発の必要性が端的に現れている。そこで、「勉強の楽しさ」や「その教科のおもしろさ」を実感できるような教材開発の視点とその実際について、具体的な教材を用いながら論じ、検討する。</p> <p>(4 松本 修／28回)</p> <p>1 教材研究(読むことを中心とした教材研究の意義と方法)(1回×4グループ)</p> <p>学習材としてのテキストをいかなる立場でいかなる方法で読むかという問題について検討する。教材テキストの構成や連続テキスト内部の構造を把握する教材分析の方法には一定の達成があるが、現実の教材が必ずしも理想的な形で構成されているわけではない。そうした教材をめぐる現状について紹介・検討するとともに、読むことを中心とした国語の教材研究の現状とその方法的意義について検討を加える。さらに、具体的な教材に即して、教材分析の方法について考察し、学習デザインとの関係について検討する。</p>	<p>オムニバス方式</p> <p>オムニバス方式</p> <p>オムニバス方式</p>

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
臨床共通科目	(教科等の実践的な指導方法の実践と課題)	<p>2 指導方法(話し合いを中核とした活動の意義と方法)(1回×4グループ)</p> <p>話し合いを中核とした学習活動は様々な場面で用いられているが、学習目標や教材の特質に応じて、活動目標としての話し合いの目標が明確に意識されているとは言い難い。学習の過程における様々な話し合い活動の持つ意義の多様性について検討し、それぞれの意義・目的に応じた具体的な方法について、事例に基づき検討する。また、文学教材の読みの交流活動の持つ意義について検討し、その具体的な方法について事例に基づき検討する。</p> <p>(14 水落 芳明/28回)</p> <p>1 指導方法(教科指導と情報教育の統合)(1回×4グループ)</p> <p>高度情報通信社会に生きる人間を育てていくことを考えたとき、情報活用能力の育成は必要不可欠な要素である。学校現場では、教育用ソフトウェアの機能に対する操作法獲得を目的としたカリキュラムが組まれ、その実行によって情報活用能力の育成を目指す授業が行われがちである。しかし、真に生きて働く情報活用能力は、教科指導と切り離して考えるべきものではない。学校生活の大半を占める教科指導の中で、教科指導の目的を果たす道具として、情報機器の効果的な活用がなされ、その活用の在り方そのものを学習者自身が評価し、選択できるものでなければならない。本講義では、その指導法について、授業実践をもとに論ずる。</p> <p>2 指導と評価(評価規準の共有化とその効果)(1回×4グループ)</p> <p>学校教育において、指導と評価の一体化を図っていくことの必要性が叫ばれるようになって久しい。その中で様々な評価法が開発され、改良が進んできている。本講義では、個々の学習者の学習過程をより正確に評価するための評価法として注目されているポートフォリオ評価について論ずる。近年開発されたデジタルポートフォリオによる相互評価を軸とした教科指導において、学習が質的に発展する過程を記録・分析することをおして、効果的な評価法としてのデジタルポートフォリオ評価の活用法とその効果を、事例的に論ずる。</p> <p>(7 岩崎 浩/24回)</p> <p>1 指導方法(知識の発展過程からみた授業構成)(1回×4グループ)</p> <p>教時間にわたる授業データ(ビデオデータ及びその筆記録)を対象として、1つの教室において新しい知識がどのように生まれ、発展していくかを主に認識論的観点及び社会的観点から読み解いていく。様々な要素が絡み合う複雑な授業過程を認識論的観点から指示の文脈と記号体系との間の相互作用過程として捉えたり、社会的観点から教師と生徒たちが特有の教室文化をつくり、それを維持しながら係わり合う相互構成過程としてよりよく理解することをおして、授業構成の在り方について論ずる。</p> <p>(3 西川 純/24回)</p> <p>1 指導と評価(量的・質的指導評価法の理論と実際)(1回×4グループ)</p> <p>指導の評価を、「取っかかり」、「データの定義」、「具体的な記述」の2つに分けて論ずる。「取っかかり」とは、漠然とした評価テーマを具体的な計画を伴った研究にするまでの部分である。「データの定義」とは、教師が普通に使っている言葉を測定可能にするため、それらを厳密に定義する段階である。その上で、子どもの姿を量的評価で見た場合と、質的評価を加えた量的評価で見た場合の違いを、具体的な事例で示す。</p>	<p>オムニバス方式</p> <p>オムニバス方式</p> <p>オムニバス方式</p>
	生徒指導、教育相談の実践と課題	<p>(概要)</p> <p>生徒指導、教育相談の実践と課題に関して、以下に掲げる内容を中心に、研究成果を踏まえた実践的内容の講義を行うとともに、「ケーススタディ形態」、「ワークショップ形態」、「プレプロジェクト科目形態」、「その他、上記を複合した形態」などの多様な形態を弾力的に組み合わせ、発表・質疑を取り入れた授業の展開を図る。</p> <p>前半(10回)は、全担当教員の共同方式によるオリエンテーション後、オムニバス方式によって、8名の担当教員が4グループ毎に次の授業内容を実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 子ども理解の内容と方法(思春期等に見られる心身症、精神疾患等に関する知識を含む。) (担当:赤坂真二、小林辰至) ○ 教員と子ども、子ども相互の人間関係 (担当:藤田武志、西川 純) ○ 子どもの健全育成の取組み (担当:林 泰成) ○ ガイダンスの機能と教育相談の充実 (担当:赤坂真二) ○ 問題行動等に関する事例研究 (担当:若井彌一) ○ 学校における生徒指導体制 (担当:廣瀬裕一) ○ 家庭、地域や関係機関との連携 など (担当:木村吉彦) 	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
臨床共通科目	(生徒指導、教育相談の実践と課題)	<p>後半(20回)は、全担当教員が共同方式によってグループ別授業(グループ別討議)、全体授業(グループ発表、まとめ)を実施する。授業内容全体に関しては、授業のテーマやねらいが貫かれ、理論と実践の架橋・融合・往還を十分に担保できるよう、全担当教員が随時、連絡調整する。よって、担当教員により授業担当回数が異なることとなる。</p> <p>(オムニバス方式(10回)及び共同方式(20回)／全30回)</p> <p>(15 赤坂 真二／32回)</p> <p>1 子ども理解の内容と方法(目的論に立つ子どもの教室における問題行動の理解)(1回×4グループ)</p> <p>多発する子どもの教室における問題行動に対し、どうしてその問題が起こったのか、なぜ、その子どもは問題行動を繰り返すのか、のように原因を探ろうとすることが一般的である。しかし、現実にはそれは効果的ではないことを指摘し、子どもの目的を考える目的論に立つことの重要性をいくつかの事例をとおして語る。そして、各自のもつ事例を目的論に立つて分析し、討論する。</p> <p>2 ガイダンス機能と教育相談の充実(実践的ガイダンスの在り方に関する考察)(1回×4グループ)</p> <p>様々な理論や手法が提案されているガイダンスであるが、実際に現場で使える理論、手法は限られているし、使う側のアレンジが必要である。現場で多くの教師が共有でき、そして実践できるガイダンスはどうあればいいのかをグループディスカッションや事例報告をとおして検討する。</p> <p>3 ガイダンス機能と教育相談の充実(事例をとおした実践的ガイダンスの在り方に関する考察)(1回×4グループ)</p> <p>児童理解や教育相談の充実が現場では言われているが、過密な教育活動中で、子ども一人ひとりへの十分な教育相談を実施することは難しい。クラスメートへの執拗な嫌がらせをしていた子どもへの関わりをとおして、実践的な教育相談の在り方を考察する。</p> <p>(2 小林 辰至／24回)</p> <p>1 子ども理解の内容と方法(学級におけるトラブルの理解と対応の実際)(1回×4グループ)</p> <p>いじめが比較的多い学級といじめがないか或いは比較的小さい学級との間で、児童の心理的ストレス症状或いはストレスフルな出来事の実験にどのような相違があるかについて実証的なデータに基づいて論ずる。また、いじめの芽を生じさせない予防的な活動としての原体験の教育的意義についても述べる。</p> <p>(6 藤田 武志／24回)</p> <p>1 教員と子ども、子ども相互の人間関係(学校内の人間関係と学校文化)(1回×4グループ)</p> <p>日本の学校における教師と子どもの関係、子ども同士の関係の実際について明らかにするとともに、それらを組みかえて新しい学校文化を創造していく方向性について論ずる。</p> <p>(3 西川 純／24回)</p> <p>1 教員と子ども、子ども相互の人間関係(教科指導による生徒指導の実際)(1回×4グループ)</p> <p>教科学習における、男女の人間関係を臨床的に分析した結果を紹介する。教科によっては、異常なジェンダーバイアスが生じ、相手の人権を認めない行動が生じることを示す。さらに、人権を侵害された側も、それを安易に認めてしまう実態を明らかにする。しかし、自分達の集団を客観的に視聴することによって、特別な指導が無くとも、対等な人間関係を形成しする過程を示す。さらに、子どもたちによって、教師が想定する以上に関係を向上する過程を紹介する。</p> <p>(9 林 泰成／24回)</p> <p>1 子どもの健全育成の取り組み(子どもたちの問題行動と健全育成)(1回×4グループ)</p> <p>学校内で起きたいじめの事例などを取り上げ、子どもたちの人間関係に関わる事例を分析する。その分析をとおして、問題を抱えた子どもの特徴を、自尊感情の低さ、規範意識の低さ、人間関係を作る力の弱さにあるととらえ、そうした状態を予防するための教育の在り方を検討し、実際に実施可能な教育プログラムの紹介と吟味を行う。また、教師が単独で行う支援や教師集団が行う支援だけでなく、スクールカウンセラーや学外の関係諸機関と連携した支援の在り方についても検討する。</p>	<p>オムニバス方式</p> <p>オムニバス方式</p> <p>オムニバス方式</p> <p>オムニバス方式</p> <p>オムニバス方式</p>

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
臨床共通科目	(生徒指導、教育相談の実践と課題)	<p>(1 若井 彌一/24回)</p> <p>1 問題行動に関する事例研究(学級内で発生しやすい問題行動の事例による実践的対応力の育成)(1回×4グループ)</p> <p>学級内で発生しやすい問題行動(授業中、昼休み時間内、放課後、部活動中)、登下校や帰宅後に発生しやすい問題行動について、訴訟にまで発展した具体的事例を取り上げて、問題行動の防止、予防の取り組み、迅速対応の在り方を明らかにする。実践的な思考力を鍛える必要から班別討議の方法を活用する。</p> <p>(12 廣瀬 裕一/24回)</p> <p>1 学校における生徒指導体制(生徒指導体制の意味とその確立の必要性、生徒指導主事の役割、校長・教頭のリーダーシップ)(1回×4グループ)</p> <p>現実に発生する生徒指導問題を事例として、各学級における生徒指導体制の整備確立とは何かを、生徒指導主事の職務と実際上の役割、校長・教頭のリーダーシップの重要性を中心として、学校における生徒指導体制についての実践的観点からの理解を深める。</p> <p>(5 木村 吉彦/24回)</p> <p>1 家庭、地域や関係機関との連携(就学前教育と小学校教育の連携の在り方—子どもの学び・育ちを連続的に捉える)(1回×4グループ)</p> <p>平成元年には幼稚園教育要領と小学校学習指導要領が、平成10年には幼稚園・小学校及び中学校学習指導要領が同時改訂された。これは、我が国の教育政策の最重要課題の一つが学校間連携にあり、子どもの学び・育ちを連続的に捉えて、一貫性・継続性をもって子どもの教育に当たることの必要性を示したものである。このような歴史的・政策的背景も踏まえ、就学前教育と小学校教育の連携の実践例を中心にしながら、連携の必要性、子どもを連続的に捉える際の視点の提供など、今日的な課題に応える。要性、子どもを連続的に捉える際の視点の提供など、今日的な課題に応える。</p>	<p>オムニバス方式</p> <p>オムニバス方式</p> <p>オムニバス方式</p>
	学級経営、学校経営の実践と課題	<p>(概要)</p> <p>学級経営、学校経営の実践と課題に関して、以下に掲げる内容を中心に、研究成果を踏まえた実践的内容の講義を行うとともに、「ケーススタディ形態」、「ワークショップ形態」、「ブレプロジェクト科目形態」、「その他、上記を複合した形態」などの多様な形態を弾力的に組み合わせ、発表・質疑を取り入れた授業の展開を図る。</p> <p>前半(10回)は、全担当教員の共同方式によるオリエンテーション後、オムニバス方式によって、8名の担当教員が4グループ毎に次の授業内容を実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 学級経営の内容と果たす役割 (担当：瀬戸 健、赤坂真二) ○ 学級経営と学校経営(学年経営案、学年会、学校行事など) (担当：松沢要一、武嶋俊行) ○ 保護者と連携を図った学級経営 (担当：武嶋俊行) ○ 学校組織、校務分掌とその機能 (担当：廣瀬裕一) ○ 校内研修の意義・形態・方法 (担当：木村吉彦) ○ 開かれた学校づくり(家庭や地域社会との連携、学校間交流の推進、学校運営と学校評議員、情報公開と説明責任) (担当：若井彌一、久保田善彦) ○ 学級・学校運営と評価 など (担当：廣瀬裕一) <p>後半(20回)は、全担当教員が共同方式によってグループ別授業(グループ別討議)、全体授業(グループ発表、まとめ)を実施する。授業内容全体に関しては、授業のテーマやねらいが貫かれ、理論と実践の架橋・融合・往還を十分に担保できるよう、全担当教員が随時、連絡調整する。よって、担当教員により授業担当回数異なることとなる。</p> <p>(オムニバス方式(10回)及び共同方式(20回)／全30回)</p> <p>(11 瀬戸 健/24回)</p> <p>1 学級経営の内容と果たす役割(学級指導力の育成)(1回×4グループ)</p> <p>学級経営は、「特別活動」の一部を構成している学級指導のみではなく、学級を学校における児童・生徒の学びと生徒の集団としての最適の状態に維持するための総合的な作用である。学級経営の内容を学級指導を中心として要説し、また、学級経営が有する学習指導・生徒指導との関連での役割、学年・学校経営との関連での役割を要説し、学級経営実践の高度化を図る。</p>	<p>オムニバス方式</p>

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
臨床共通科目	(学級経営、学校経営の実践と課題)	<p>(13 松沢 要一/24回)</p> <p>1 学級経営の内容と果たす役割 (実践的な学級経営力) (1回×4グループ)</p> <p>学級で生じた具体的な事例 (学習指導上の事例、生徒指導上の事例) を挙げ、それらが学級経営上のどこに起因しているのかを分析し、どのような経営が望ましかったのかを考察する。このことをとおして、実践的な学級経営力の高度化を図る。さらに、学級経営と学年経営、学校経営との関連を考察し、グランドデザインとの関連性にも触れながら、学校の教育目標達成に向けての学級経営であることの理解を深める。</p>	オムニバス方式
		<p>(15 赤坂 真二/24回)</p> <p>1 学級経営の内容と果たす役割 (学級で育てる力とクラス会議の効果) (1回×4グループ)</p> <p>学級は安心して過ごせる場から、子どもが最もストレスを感じる空間へととなりつつある。しかし、子どもにとって学級は、最も関心の高い場所の一つである。今、学級でどのような力をどのように育てていけばいいか。グループミーティングによって学級を育成するプログラムをとおして論ずるとともに、ワークショップ形式でプログラムを体験する。</p>	オムニバス方式
		<p>(10 武嶋 俊行/28回)</p> <p>2 学級経営と学校経営 (学年会、学校行事に関する事例分析) (1回×4グループ)</p> <p>学級経営は、児童生徒に対する具体的で直接的な学習・生徒指導において重要なだけでなく、学校教育目標を達成する為に充実した学校経営を行う上でも極めて重要な役割を果たすことを具体的事例を示して要説する。その上で、学校経営と学級経営を緊密に連結調整する学年経営の中心機関である学年会の実際の機能及び学校行事を実施する際の学級経営上の具体的な留意点を事例分析的に解説し、実践的な学級経営力の高度化を図る。</p> <p>3 保護者と連携をはかった学級経営 (保護者と連携をはかった学級経営の事例的分析) (1回×4グループ)</p> <p>学校教育が効果をあげるためには、保護者との連携を図り、良好な協力関係を維持することが不可欠であることを具体的事例によって理解を深める。その上で、学級経営における学習指導と生徒指導の具体的な事例を基にして保護者との連携を如何にして維持するかを要説し、実践的な学級経営力の高度化を図る。特に学級担任と保護者が葛藤関係にある場合の事例も取り上げ、保護者との効果的な連携を図る上で学級担任を支援する学年主任と生徒指導主事の果たす役割についても解説し、学級経営に関する実践場面での総合的理解を深める。</p>	オムニバス方式
		<p>(12 廣瀬 裕一/28回)</p> <p>1 学校組織、校務分掌とその機能 (学校組織・校務分掌の事例的分析) (1回×4グループ)</p> <p>公立学校は、法定された教育目的・目標を組織的に達成しようとする人的・物的・運営的要素で構成される教育機関であることについて要説し、組織運営における学校裁量権限の意義と限界を論ずる。その上で、学校組織、校務分掌の複数の実践例を示し、各事例における学校の内部組織がそれぞれに関連しつつ、どのような機能を果たしているかを検証するとともに、限られた教員定数の中で組織の効率化と教員の力量向上を図る視点から運営改善の在り方を論じ、校務運営実践力の高度化を図る。</p> <p>2 学級・学校運営と評価 (1回×4グループ)</p> <p>平成14年3月制定の小・中学校の設置基準により、学校の自己点検・評価・公開の努力達成が規定された。この規定により各学校では、学級・学年・学校全体の運営に一層の創意工夫をし、自己評価し、外部からの評価を受けることが課題とされている。その目的は学校の自主性・自律性の確立にあるが、運用を誤ると却って主体性を失った信頼されない学校となる危険を孕む。本講義では、新たな課題に対応できる理論的、実践的な力量の基本となる事項を要説し、実践力の高度化を図る。</p>	オムニバス方式
		<p>(5 木村 吉彦/24回)</p> <p>1 校内研修の意義・形態・方法 (子どもの姿をもとに語り合い、教師の力量形成を図る校内研修の在り方) (1回×4グループ)</p> <p>これまでの一般的な教育実践研究のスタイルとしての「仮説検証型」研究では、子どもを全人的に理解することは困難であると思われる。なぜなら、子どもを或る限られた窓口 (仮説) からしか観ようとしなからである。もちろん、ある特定の限定された課題についての検証は可能である。それに対して「羅生門的アプローチ」と呼ばれる教育実践研究のスタイルは、子どもを多角的・多面的に観ることで、子どもの全人的理解を可能にすることが期待できる。この二つの実践研究方法を比較検討しながら、教科の特性や研究課題に見合った教育実践研究の在り方を追究する。</p>	オムニバス方式

科目 区分	授業科目の名称	講 義 等 の 内 容	備 考
臨 床 共 通 科 目	(学級経営、学校経営 の実践と課題)	<p>(1 若井 彌一/24回)</p> <p>1 開かれた学校づくり (家庭や地域社会との連携) (1回×4グループ) いわゆる、「開かれた学校づくり」を進める際に重視することが重要な①家庭や地域 社会との連携、②学校開放の推進、③学校運営への学校評議員の積極的活用、④積極的 な情報公開と説明責任の遂行、について、それぞれの要点と留意点を明らかにする。</p> <p>(16 久保田 善彦/24回)</p> <p>1 開かれた学校づくり (学校における家庭や地域人材の活用の意義と連携の実際) (1回×4グループ) 総合的な学習やキャリア教育など、現代の学校の指導内容は広範囲になっている。担 当教師と外部講師が連携することで、教育活動を進めるべき内容も多い。そこで、学校 教育における地域の教育力、社会人講師の活用の意義を明らかにするとともに、事例か ら外部人材活用の手順と形態を整理する。また、インターネットの利用など、地域や家 庭との多様な連携についてその方法を論じる。</p>	<p>オムニバ ス方式</p> <p>オムニバ ス方式</p>
	学校教育と教員の在り 方に関する事例研究	<p>(概要)</p> <p>学校教育と教員の在り方に関する事例研究に関して、以下に掲げる内容を中心に、研究 成果を踏まえた実践的内容の講義を行うとともに、「ケーススタディ形態」、「ワークショ ュップ形態」、「プレプロジェクト科目形態」、「その他、上記を複合した形態」などの多様な 形態を弾力的に組み合わせ、発表・質疑を取り入れた授業の展開を図る。</p> <p>前半 (10回) は、全担当教員の共同方式によるオリエンテーション後、オムニバス方式 によって、6名の担当教員が4グループ毎に次の授業内容を実施する。</p> <p>○ 学校と社会 (社会における学校教育の位置付け、学校教育の役割、学校教育が抱える 課題等の俯瞰) (担当：藤田武志、武嶋俊行、廣瀬裕一)</p> <p>○ 上記のような学校における教員の社会的役割と社会的・職業的倫理 (担当：若井彌一)</p> <p>○ 上記のような社会、学校における教員に必要なコミュニケーション論 (対子ども、保 護者、同僚、学校外 (関係機関、広く社会)) など (担当：瀬戸 健、西川 純)</p> <p>後半 (20回) は、全担当教員が共同方式によってグループ別授業 (グループ別討議)、 全体授業 (グループ発表、まとめ) を実施する。授業内容全体に関しては、授業のテーマ やねらいが貫かれ、理論と実践の架橋・融合・往還を十分に担保できるよう、全担当教員 が随時、連絡調整する。よって、担当教員により授業担当回数異なることとなる。</p> <p>(オムニバス方式 (10回) 及び共同方式 (20回) / 全30回)</p> <p>(6 藤田 武志/32回)</p> <p>1 学校と社会 (社会における学校の位置づけの変化と今後の展望) (1回×4グループ) 社会における学校の語られ方がどう変化してきたのかを明らかにするとともに、これ からの学校の位置づけ方をどう構想するか、そこに向けてどう行動していくかを論ずる。 ずる。</p> <p>2 学校と社会 (格差社会における学校教育の役割) (1回×4グループ) 階層格差などによって生じるさまざまな子どもの困難の状況について明らかにすると ともに、格差の是正という学校の役割の在り方とその具体的方策について論ずる。</p> <p>3 学校と社会 (学力をめぐる問題の現代的構造と対処の方向性) (1回×4グループ) 受験競争や学力低下など、学力をめぐる問題の歴史的変遷と現代的構造について明ら かにするとともに、問題への対処方法について論ずる。</p> <p>(10 武嶋 俊行/24回)</p> <p>1 学校と社会 (学校教育の役割と課題等の俯瞰) (1回×4グループ) 我が国では、法律に定める学校で行われる公教育が国家や社会の将来を左右する重要 な営為又は事業と位置づけられ、学校教育は戦後の復興と経済発展を支える重要な役割 を果たしてきた。このような戦後教育史に対するマクロな理解を深めるとともに、さら に今日の学校教育が抱える葛藤や諸課題について具体的事例を提示し、学校と社会の関 係について理論的及び実践的観点から考察する。これにより学校教育に対する幅広い課 題意識をもって教育活動に当たることのできる実践的能力の高度化を図る。</p> <p>(12 廣瀬 裕一/24回)</p> <p>1 学校と社会 (学力をめぐる問題の現代的構造と対処の方向性) (1回×4グループ) 受験競争、ゆとり教育、学力低下、未履修問題など、それぞれの時代・社会との関わり の中で学力をめぐる問題がどのように論じられ推移してきたかを概観し、その現代的 構造について理解を深めるとともに、問題への対処の方向性を論ずる。特に、学校教育 の中で育成すべき学力の内容と方法について授業の実践事例等とおして考察すること を基軸にして、自主性・自律性を確立し社会に信頼される学校づくりを進めるための条 件整備の在り方を具体的に検討する。講義と演習を併用する。</p>	<p>オムニバ ス方式</p> <p>オムニバ ス方式</p>

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
臨床共通科目	(学校教育と教員の在り方に関する事例研究)	<p>(1 若井 彌一/28回)</p> <p>1 教員の社会的役割と社会的・職業的倫理 (教員の社会的役割) (1回×4グループ) 法律に定める学校の公共的な役割、そのような学校に勤務する教員の社会的役割と使命、指導したもの(子ども)に対する個人的及び協同的責任を負うという職業的倫理についての理解を深め、教職への人間的及び専門的資質を備える実践的能力の向上を促す。講義と演習を併用する。</p> <p>2 教員の社会的役割と社会的・職業的倫理 (教員の職業的倫理) (1回×4グループ) 教員の社会的役割と職業倫理については、理想的な方向に向けての教育論的アプローチだけではなく、現実には発生する課題への対応能力を視野に入れて法律論的アプローチによって、実践的な能力を育成することが不可欠の課題である。この講義では、主に課題事例の解説及び考察をとおして、教員の社会的役割と職業倫理を巡り、何が問題となりやすく、何が争点となり、どのようなことに備える必要があるかについて問題解決・対応能力の高度化を図る。</p> <p>(11 瀬戸 健/28回)</p> <p>1 学校における教員に必要なコミュニケーション論 (教師に必要なコミュニケーション能力) (1回×4グループ) 教員に必要なコミュニケーション能力を、対子どもと対保護者に限定(焦点化)して、コミュニケーション活動の内容・場面別に、どのようなコミュニケーションのとり方が必要とされているか、どのようにして、必要とされるコミュニケーション能力を身につけるかについて演習する。受講者が、教育活動・内容・場面別に想定されるコミュニケーションの内容と方法について体験等を例として構想し、そのレポートを素材として、受講者が全員で分析・検証し、必要とされるコミュニケーション能力の共有化を図り、能力獲得の具体的方法を会得する。</p> <p>2 学校における教員に必要なコミュニケーション論 (様々なコミュニケーション能力) (1回×4グループ) 教職の主要な職務は「対人的」なものである。しかも、「対人的」なものの内容は、物理的、技術的であるよりも、むしろ文化的、精神的なものである。教職に必要とされる、子ども(児童生徒)、保護者、同僚、学校外の関係機関とのコミュニケーション能力について具体的な事例を提示しつつ、理解を深め、教師としてのコミュニケーション能力の高度化を図る。</p> <p>(3 西川 純/24回)</p> <p>1 学校における教員に必要なコミュニケーション論 (私語再考) (1回×4グループ) 授業中の私語は「悪」として否定されている。しかし、学習者が主体的に学習するとき、教師からは私語と認識される会話が増加する。しかし、その会話を分析すると、学習課題と関連する会話と、学習課題から逸脱した会話が混在となっていることが明らかになった。しかし、このような会話が成立した集団は、人間関係が向上し、高い達成度である。一方、学習課題から逸脱した会話の全く無い集団は、教師からは「良い集団」と認識される。しかし、その人間関係は悪く、学習達成度の質も低いことを明らかにする。</p>	<p>オムニバス方式</p> <p>オムニバス方式</p> <p>オムニバス方式</p>

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
コース別選択科目	教育実践リフレクションⅠ	<p>実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験を、自ら学校における課題に主体的に取り組み解決する即応力を培うため、実習での活動計画の立案に加え、学校における教育実習での経験を、反省的に意味づけるための科目である。</p> <p>本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、主体的に学校運営や学級運営に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。実習の活動計画においては、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点を組み込むものとする。実習中においても実習校の指導教諭とともに、担当教員が随時指導するものとする。また、共通に扱われる内容として「教科学習」「特別活動」及び「生徒指導・進路指導」の省察を必ず行い、授業実践能力の向上に資するものとする。</p> <p>なお、授業は、複数の教員が独立して授業を担当する方式で行う。授業の実施時期及び実施場所等は、学校支援フィールドワークの形態及び連携協力校の実態に応じて、柔軟に対応する。</p> <p>授業方法・内容は、次の授業内容について基本的に1～10回は実習前に、11～20回は実習期間中に、21～30回は実習後に行う。</p> <p>1回：オリエンテーション 2回：学校支援フィールドワーク課題の設定① 3回：学校支援フィールドワーク課題の設定② 4回：学校支援フィールドワーク課題の設定③ 5～6回：連携協力校の実態と教育課題の把握 7～10回：連携協力校の教育課題に対する支援案の作成 11～20回：学校支援フィールドワーク期間中のリフレクション 21～22回：ワークショップ 23～26回：学校支援フィールドワーク課題に関する総括 27～30回：連携協力校の教育課題への支援に関する総括</p>	<p>独立方式</p> <p>小林辰至 西川 純 松本 修 木村吉彦 藤田武志 岩崎 浩 朝倉啓爾 林 泰成 瀬戸 健 松沢要一 水落芳明 赤坂真二 久保田善彦</p>
	教育実践リフレクションⅡ	<p>「教育実践リフレクションⅠ」を踏まえ、より深い省察を行うものとし、実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験を、自ら学校における課題に主体的に取り組み解決する即応力を培うため、実習での活動計画の立案に加え、学校における教育実習での経験を、反省的に意味づけるための科目である。</p> <p>本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、主体的に学校運営や学級運営に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。実習の活動計画においては、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点を組み込むものとする。実習中においても実習校の指導教諭とともに、担当教員が随時指導するものとする。また、共通に扱われる内容として「教科学習」「特別活動」及び「生徒指導・進路指導」の省察を必ず行い、授業実践能力の向上に資するものとする。</p> <p>なお、授業は、複数の教員が独立して授業を担当する方式で行う。授業の実施時期及び実施場所等は、学校支援フィールドワークの形態及び連携協力校の実態に応じて、柔軟に対応する。</p> <p>授業方法・内容は、次の授業内容について基本的に1～10回は実習前に、11～20回は実習期間中に、21～30回は実習後に行う。</p> <p>1回：オリエンテーション 2回：学校支援フィールドワーク課題の設定① 3回：学校支援フィールドワーク課題の設定② 4回：学校支援フィールドワーク課題の設定③ 5～6回：連携協力校の実態と教育課題の把握 7～10回：連携協力校の教育課題に対する支援案の作成 11～20回：学校支援フィールドワーク期間中のリフレクション 21～22回：ワークショップ 23～26回：学校支援フィールドワーク課題に関する総括 27～30回：連携協力校の教育課題への支援に関する総括</p>	<p>独立方式</p> <p>小林辰至 西川 純 松本 修 木村吉彦 藤田武志 岩崎 浩 朝倉啓爾 林 泰成 瀬戸 健 松沢要一 水落芳明 赤坂真二 久保田善彦</p>

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
コース別選択科目	教育実践プレゼンテーションⅠ	<p>実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験を、リフレクション科目で反省的に意味づけた結果を、伝えることによって学ぶ科目である。</p> <p>本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、主体的に学校運営や学級運営に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。また、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点が組み込まれている。この趣旨を生かしたプレゼンテーションを行う。</p> <p>受講者及び実習校（クラス）によって課題が異なるため、実習の内容については様々である。それに伴い連携するリフレクションで扱う内容も様々である。しかし、受講者によって学習内容に著しい不均衡を生じさせないよう、共通に扱われる内容として「教科学習」「特別活動」及び「生徒指導・進路指導」の省察に関するプレゼンテーションを必ず含むものとする。</p> <p>なお、授業は、複数の教員が独立して授業を担当する方式で行う。授業方法・内容は、次の授業内容について実施する。</p> <p>1回：オリエンテーション 2回：プレゼンテーションの技法 3～6回：プレゼンテーション資料の作成 7～8回：プレゼンテーション及び討議</p>	<p>独立方式</p> <p>小林辰至 西川 純 松本 修 木村吉彦 藤田武志 岩崎 浩 朝倉啓爾 林 泰成 瀬戸 健 松沢要一 水落芳明 赤坂真二 久保田善彦</p>
	教育実践プレゼンテーションⅡ	<p>「教育実践プレゼンテーションⅠ」を踏まえ、より深い省察を行うものとし、実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験を、リフレクション科目で反省的に意味づけた結果を、伝えることによって学ぶ科目である。</p> <p>本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、主体的に学校運営や学級運営に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。また、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点が組み込まれている。この趣旨を生かしたプレゼンテーションを行う。</p> <p>受講者及び実習校（クラス）によって課題が異なるため、実習の内容については様々である。それに伴い連携するリフレクションで扱う内容も様々である。しかし、受講者によって学習内容に著しい不均衡を生じさせないよう、共通に扱われる内容として「教科学習」「特別活動」及び「生徒指導・進路指導」の省察に関するプレゼンテーションを必ず含むものとする。</p> <p>なお、授業は、複数の教員が独立して授業を担当する方式で行う。授業方法・内容は、次の授業内容について実施する。</p> <p>1回：オリエンテーション 2回：プレゼンテーションの技法 3～6回：プレゼンテーション資料の作成 7～8回：プレゼンテーション及び討議</p>	<p>独立方式</p> <p>小林辰至 西川 純 松本 修 木村吉彦 藤田武志 岩崎 浩 朝倉啓爾 林 泰成 瀬戸 健 松沢要一 水落芳明 赤坂真二 久保田善彦</p>
	学校運営リフレクションⅠ	<p>実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験を、自ら学校における課題に主体的に取り組み解決する即応力を培うため、実習での活動計画の立案に加え、学校における教育実習での経験を、反省的に意味づけるための科目である。</p> <p>本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、主体的に学校運営や学級運営に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。実習の活動計画においては、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点を組み込むものとする。実習中においても実習校の指導教諭とともに、担当教員が随時指導するものとする。また、共通に扱われる内容として「教科学習」「特別活動」及び「生徒指導・進路指導」の省察を必ず行い、授業実践能力の向上に資するものとする。</p> <p>なお、授業は、複数の教員が独立して授業を担当する方式で行う。授業の実施時期及び実施場所等は、学校支援フィールドワークの形態及び連携協力校の実態に応じて、柔軟に対応する。</p> <p>授業方法・内容は、次の授業内容について基本的に1～10回は実習前に、11～20回は実習期間中に、21～30回は実習後に行う。</p> <p>1回：オリエンテーション 2回：学校支援フィールドワーク課題の設定① 3回：学校支援フィールドワーク課題の設定② 4回：学校支援フィールドワーク課題の設定③ 5～6回：連携協力校の実態と教育課題の把握 7～10回：連携協力校の教育課題に対する支援案の作成 11～20回：学校支援フィールドワーク期間中のリフレクション 21～22回：ワークショップ 23～26回：学校支援フィールドワーク課題に関する総括 27～30回：連携協力校の教育課題への支援に関する総括</p>	<p>独立方式</p> <p>小林辰至 西川 純 松本 修 木村吉彦 藤田武志 岩崎 浩 朝倉啓爾 林 泰成 瀬戸 健 松沢要一 水落芳明 赤坂真二 久保田善彦</p>

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
コース別選択科目	学校運営リフレクションⅡ	<p>「学校運営リフレクションⅠ」を踏まえ、より深い省察を行うものとし、実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験を、自ら学校における課題に主体的に取り組み解決する即応力を培うため、実習での活動計画の立案に加え、学校における教育実習での経験を、反省的に意味づけるための科目である。</p> <p>本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、主体的に学校運営や学級運営に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。実習の活動計画においては、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点を組み込むものとする。実習中においても実習校の指導教諭とともに、担当教員が随時指導するものとする。また、共通に扱われる内容として「教科学習」「特別活動」及び「生徒指導・進路指導」の省察を必ず行い、授業実践能力の向上に資するものとする。</p> <p>なお、授業は、複数の教員が独立して授業を担当する方式で行う。授業の実施時期及び実施場所等は、学校支援フィールドワークの形態及び連携協力校の実態に応じて、柔軟に対応する。</p> <p>授業方法・内容は、次の授業内容について基本的に1～10回は実習前に、11～20回は実習期間中に、21～30回は実習後に行う。</p> <p>1回：オリエンテーション 2回：学校支援フィールドワーク課題の設定① 3回：学校支援フィールドワーク課題の設定② 4回：学校支援フィールドワーク課題の設定③ 5～6回：連携協力校の実態と教育課題の把握 7～10回：連携協力校の教育課題に対する支援案の作成 11～20回：学校支援フィールドワーク期間中のリフレクション 21～22回：ワークショップ 23～26回：学校支援フィールドワーク課題に関する総括 27～30回：連携協力校の教育課題への支援に関する総括</p>	<p>独立方式</p> <p>小林辰至 西川 純 松本 修 木村吉彦 藤田武志 岩崎 浩 朝倉啓爾 林 泰成 瀬戸 健 松沢要一 水落芳明 赤坂真二 久保田善彦</p>
	学校運営プレゼンテーションⅠ	<p>実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験を、リフレクション科目で反省的に意味づけた結果を、伝えることによって学ぶ科目である。</p> <p>本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、主体的に学校運営や学級運営に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。また、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点が組み込まれている。この趣旨を生かしたプレゼンテーションを行う。</p> <p>受講者及び実習校（クラス）によって課題が異なるため、実習の内容については様々である。それに伴い連携するリフレクションで扱う内容も様々である。しかし、受講者によって学習内容に著しい不均衡を生じさせないよう、共通に扱われる内容として「教科学習」「特別活動」及び「生徒指導・進路指導」の省察に関するプレゼンテーションを必ず含むものとする。</p> <p>なお、授業は、複数の教員が独立して授業を担当する方式で行う。授業方法・内容は、次の授業内容について実施する。</p> <p>1回：オリエンテーション 2回：プレゼンテーションの技法 3～6回：プレゼンテーション資料の作成 7～8回：プレゼンテーション及び討議</p>	<p>独立方式</p> <p>小林辰至 西川 純 松本 修 木村吉彦 藤田武志 岩崎 浩 朝倉啓爾 林 泰成 瀬戸 健 松沢要一 水落芳明 赤坂真二 久保田善彦</p>
	学校運営プレゼンテーションⅡ	<p>「学校運営プレゼンテーションⅠ」を踏まえ、より深い省察を行うものとし、実習科目「学校支援フィールドワーク」での経験を、リフレクション科目で反省的に意味づけた結果を、伝えることによって学ぶ科目である。</p> <p>本学教職大学院における実習は、受講者の明確な課題意識の基に、主体的に学校運営や学級運営に関わり、実習校の責任ある一員として参加する、高度に専門的な「実務実習」である。また、受講者個々の指導力の向上だけでなく、所属する学校全体或いは地域の学校全体の教育力の充実につながる視点が組み込まれている。この趣旨を生かしたプレゼンテーションを行う。</p> <p>受講者及び実習校（クラス）によって課題が異なるため、実習の内容については様々である。それに伴い連携するリフレクションで扱う内容も様々である。しかし、受講者によって学習内容に著しい不均衡を生じさせないよう、共通に扱われる内容として「教科学習」「特別活動」及び「生徒指導・進路指導」の省察に関するプレゼンテーションを必ず含むものとする。</p> <p>なお、授業は、複数の教員が独立して授業を担当する方式で行う。授業方法・内容は、次の授業内容について実施する。</p> <p>1回：オリエンテーション 2回：プレゼンテーションの技法 3～6回：プレゼンテーション資料の作成 7～8回：プレゼンテーション及び討議</p>	<p>独立方式</p> <p>小林辰至 西川 純 松本 修 木村吉彦 藤田武志 岩崎 浩 朝倉啓爾 林 泰成 瀬戸 健 松沢要一 水落芳明 赤坂真二 久保田善彦</p>

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
コース別選択科目	学び合いの授業論	認知研究の成果から、知識・技能の相対的に高い教師は、知識・技能の相対的に低い学習者（特に成績の低い学習者）がどのように理解しているかを、理解できないことを明らかにする。また、学習者の理解は多様であり、教師一人ではその多様性に対応しきれないことを明らかにする。このことから、学習者相互に学び合う学習の必然性を明らかにする。その後、学び合いによって、知識・技能が向上と、人間関係の向上が無矛盾に成立することを明らかにする。さらに、学び合いの関係が、複雑になることによって集団が安定することを明らかにする。	
	学習デザイン論	教育研究において、最もその変化の大きい情報教育研究に焦点を当てる。その研究成果から、様々に開発されたテクノロジーが教育現場に導入されることで、かつては夢物語であったような授業が可能となった。しかし、同時に、どんなに技術が進んでも、人間がもつ能力を超えることは不可能であり、それを無視した研究はナンセンスであることを指摘する。さらに、日進月歩で発展を続ける文明の活用を目的とした授業デザインは、一瞬にして陳腐になってしまう危険性を指摘し、人間のもつ能力を最大限に活用する学習デザインの必要性を明らかにする。	
	教科内容・方法学特論	各教科における環境問題等の学際的な内容の取り上げ方とその関連付けの実際について、教科教育の今日的意義と目的の観点から考察するとともに、その指導方略として“The four question strategy”を取り上げ、子ども自らが追究できる資質能力を獲得させるためのカリキュラムの在り方及び教員の支援の在り方について具体的な教材研究・教育課程開発をととして習得する。	
	勇気づけの学級づくり論	授業や学級づくりは、子どもの実態や教師の力量に影響されることが多く、一般化されにくいとされてきた。特に、学級づくりは断片的な技術は分かち合うことができても、その基本的な考え方や哲学は、それぞれの教師の「名人芸」として、公開されにくいものである。本授業では、多様な考え方があってしかるべき学級づくりに、あえてモデルプランを示す。そして、その学級づくりによってどのような学級ができ、どのような子どもが育つのかを明らかにする。また、理論化したりプログラム化したりすることが難しい、小さな学級づくりの技術を集め、実はそうした技術が、学級づくりに重要な役割を示していることを明らかにする。	
	道徳性の発達と支援	児童生徒の人格形成の支援は、道徳性の発達についての理解を抜きには行いえない。そこで、ピアジェやコールバーグラの理論を中心に、児童生徒の認知的発達や情意的発達と道徳性・社会性との関連、さらには具体的行動との関連について学び、道徳の時間における支援策を身に付けるだけでなく、学校教育全体をととして行われる道徳教育・生徒指導において活用可能な、具体的な支援の技術を身に付ける。	
	特別支援教育における授業づくりの理論と実際	現在、我が国の発達障害のある児童生徒への教育は大きな転換期を迎えている。従来の障害の種類や程度に応じた「特殊教育」から、子ども一人ひとりの特別な教育的ニーズに即した「特別支援教育」へのチャレンジといえる。本授業の目標は、受講者が、特別支援教育における「授業づくりを核とする実践的指導力の向上」に関わる専門的知識・技能の習得を通じて、「いま、そしてこれからの学校教育とそれを担う教員に求められる使命と役割、課題は何か」について考究することである。	
	授業と学校の改善に向けた教育調査の理論と実際	授業や学校の改善には調査による実態把握が不可欠である。そこで本講義では、授業や学校を改善していくための教育調査の考え方や調査手法の基礎を身につけることを目標とする。具体的には、質問紙を用いた量的調査、観察やインタビューを用いた質的調査など、社会調査としての教育調査の理論と技法の概要を学ぶとともに、調査をもとに現実に働きかけることによって授業や学校を改善するアクションリサーチの実際や、学校の教育活動や教育政策を評価するツールとして調査の実際について学習する。	
	国語科授業のデザインと評価	<p>(概要)</p> <p>国語科の授業のデザインについて、①学習指導要領も含めたカリキュラムの考え方やカリキュラムデザイン、②教科書を代表とする教材・学習材の構成の在り方（教材研究と学習過程デザインの関係）、③国語科における教育研究の在り方と方法、④学習過程のデザインと学習者研究の在り方、⑤学習過程における学習者の評価とカリキュラムへのフィードバックの在り方、などについて、具体的な教材や授業実践を資料として検討し、国語科授業研究の方法を身につけることをねらいとする。</p> <p>授業方法・内容は、全担当教員の共同方式によるオリエンテーション後、オムニバス方式によって、2名の担当教員が各コマ毎に次の授業内容を実施する。よって、担当教員により授業担当回数異なることとなる。</p> <p>(オムニバス方式 (14回) 及び共同方式 (1回) / 全15回)</p> <p>国語科のカリキュラムデザイン1 (1回) (担当: 松本 修)</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
コース別選択科目	(国語科授業のデザインと評価)	<p>国語科のカリキュラムデザイン2 (1回) (担当:松本 修)</p> <p>国語科における教材・学習材の構成1 (1回) (担当:松本 修)</p> <p>国語科における教材・学習材の構成2 (1回) (担当:松本 修)</p> <p>教材研究と学習過程デザインの関係 (1回) (担当:松本 修)</p> <p>国語科教育研究の在り方と方法1 (1回) (担当:迎 勝彦)</p> <p>国語科教育研究の在り方と方法2 (1回) (担当:迎 勝彦)</p> <p>国語科教育研究の在り方と方法3 (1回) (担当:迎 勝彦)</p> <p>国語科教育研究の在り方と方法4 (1回) (担当:迎 勝彦)</p> <p>学習過程のデザインと学習者研究の在り方1 (1回) (担当:松本 修)</p> <p>学習過程のデザインと学習者研究の在り方2 (1回) (担当:松本 修)</p> <p>学習過程のデザインと学習者研究の在り方3 (1回) (担当:松本 修)</p> <p>学習過程における学習者の評価とカリキュラムへのフィードバック1 (1回) (担当:松本 修)</p> <p>学習過程における学習者の評価とカリキュラムへのフィードバック2 (1回) (担当:松本 修)</p>	オムニバス方式
	算数・数学科授業デザイン論	日本の算数・数学教育の問題点の一つは、「算数・数学の勉強の楽しさ」を強く感じている児童・生徒が国際平均値を大きく下回っていることにある。このことを克服するための一つの方法として「教材開発」に焦点を絞り、どのような要件を備えた教材が有効であるかを、具体的な教材例を基にしながらかつ分析する。そして、そのような要件をもった教材を実際に開発し、それらを用いた模擬授業を行う。これらのことをとおして、教材開発力や実践的な指導技術等を高め、実践的な力量形成を図る。	
	教科の固有性を踏まえた算数・数学科の学習指導の理論と実際	学校教育における中心である教科の指導は、教科の固有性を踏まえることでより豊かな学習指導となる。本講義では、算数・数学科の学習指導を例として、次の三つの主題を取り上げる。それぞれの主題について、教育実践場面とともに具体的な考え方やアプローチの仕方を提示する。(1)教科の固有性を踏まえた学習指導において、特に教師にとって重要な教科の知識は何か。それはなぜ大切なのか。(2)教科の固有性を踏まえた学習指導の実際：それはどのように展開されているのか、そこにはどのような特徴があり、どのようにして実現されているのか。(3)自らの指導を教科の固有性を踏まえた学習指導として改善したり、新たに開発していくためにはどうすればよいのか。	
	理科授業デザイン論	近年、認知心理学等の影響を受け、理科授業の学習論が変化している。そこでは、子どもの視点に立った理科授業を如何にデザインするかに注目が集まっている。本論では、学習論の変遷、子ども児童の学びの捉え方、それらを基礎として教材開発や単元開発、指導指導形態の在り方等を論じる。また、テクノロジーを利用した理科授業デザインの在り方を実践現場に即して検討する。更には、授業研究の進め方やまとめ方を論じる。	
社会認識を深める授業づくりの実際と課題	<p>(概要)</p> <p>社会系の教科や科目の特質を踏まえた教材研究の視点と方法、児童・生徒の実態を踏まえた教材化の工夫、教材・教具の活用、学習形態の選択など、効果的な授業を実現する上で考慮すべき点について実践的に検討する。また、社会認識の育成を重視した「総合的な学習の時間」の教材化の工夫やカリキュラム開発について実践的に検討する。</p> <p>授業方法・内容は、全担当教員の共同方式によるオリエンテーション後、オムニバス方式及び共同方式によって、3名の担当教員が各コマ毎に次の授業内容を実施する。よって、担当教員により授業担当回数異なることとなる。</p> <p>(オムニバス方式 (10回) 及び共同方式 (5回/全15回))</p> <p>社会系教科の特質Ⅰー地理的分野を中心にー (2回) (担当:朝倉啓爾)</p> <p>社会系教科の特質Ⅱー歴史的分野を中心にー (2回) (担当:釜田 聡)</p> <p>社会系教科の特質Ⅲー公民的分野を中心にー (2回) (担当:釜田 聡)</p>	オムニバス方式	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
コース別選択科目	学校経営と人権教育特論	<p>基本的人権の保障は、我が国の憲法の大きな柱の一つである（特に第3章 国民の権利及び義務）。また、1989（平成元）年に、国連で「児童の権利に関する条約」が採択され、国内的には、2000（平成12）年に、人権教育及び人権啓発の推進に関する法律が制定されたこともあり、各学校における人権保障の在り方、人権教育の充実した取り組みが、学校経営上の大きな課題となっている。</p> <p>本科目は、人権の概念と人権保障の重要性、人権保障の法的整備の現状について概要を講述するとともに、特に学校における児童・生徒に対する人権保障の配慮と人権教育の取り組みを、具体的事例を取り上げて解説し、協議することにより、学校における人権教育を推進していく実践的力量的の向上を目指すものである。</p>	
	校内の授業研究のシステム化と授業研究の方法	<p>学校の教育力（「学校力」）と教師の力量（「教師力」）を高めていくために授業研究が有効である。先進的な実践校の「学校力」と「教師力」はシステム化された質の高い授業研究によって支えられている。本授業は、その実践校の一つである上越市立大手町小学校を事例にして（なお他校の事例も比較する予定である）、以下の2点に取り組む。</p> <p>①研究推進委員会を中核とする授業研究システムと個々の教師の授業研究へのフィードバックの仕組み ②個々の教師の授業研究の特性を分析する研究法の習得</p>	
	体で学ぶ一斉指導の基礎技法	<p>最近「小一プロブレム」など児童のコミュニケーション能力や人間関係をつくる能力の低下による学校生活の不応状況が多く報告されている。本講義では、まず学級内の秩序を確保し安心して学ぶことができるよう、学級集団の制御、児童生徒が意欲を高める授業の導入、教師の表現力の伸長など一斉指導の基礎技法を学ぶ。特に講義の初めでは、学校生活における基本的な生活習慣の指導にもふれる。</p>	
実習科目	学校支援フィールドワークⅠ（ストレート）	<p>1年次に連携協力校において履修する実習科目である。即戦力となる新人教員の養成のため、連携協力校において教壇実習を中心に実習しながら課題を遂行する中で、教師としての使命感・自覚を身に付けるとともに、子ども理解に基づいて授業計画力、授業指導力、授業分析力を養うことを目的とする。</p> <p>なお、授業は、複数の教員が独立して授業を担当する独立方式で行う。</p> <p>学校支援フィールドワークの実施については、次の流れで行う。</p> <p>(1) 年度当初に受講者と実習担当教員を決定し、連携協力校と打ち合わせを行う。</p> <p>(2) 随時協議を行い実習の研究テーマと方法を定める。</p> <p>(3) 実習開始2週間前に連携協力校に受講者と実習担当教員が連絡をとり、学校支援フィールドワーク個別計画表を提出、打ち合わせを行う。</p> <p>(4) 実習終了後、実習担当教員が連携協力校と連絡をとり、実施状況について意見を求める。</p> <p>(5) 具体的には、週2日を連携協力校での実習を行い、3日間は分析と実践の準備にあたるようなパターンから、週5日の実習を行い、間に2週間程度の学校支援リフレクションの期間をおいて後半を行うパターンなどによる。</p>	<p>独立方式</p> <p>若井彌一 小林辰至 西川 純 松本 修 木村吉彦 藤田武志 岩崎 浩 朝倉啓爾 林 泰成 武嶋俊行 瀬戸 健 廣瀬裕一 松沢要一 水落芳明 赤坂真二 久保田善彦</p>
	学校支援フィールドワークⅡ（ストレート）	<p>2年次に連携協力校において履修する実習科目である。この科目は「学校支援フィールドワークⅠ（ストレート）」を踏まえて、引き続き継続し、連携協力校において教壇実習を中心に実習しながら課題を遂行する中で、教師としての使命感・自覚を身に付けるとともに、子ども理解に基づいて授業計画力、授業指導力、授業分析力を養うことを目的とする。</p> <p>なお、授業は、複数の教員が独立して授業を担当する独立方式で行う。</p> <p>学校支援フィールドワークの実施については、次の流れで行う。</p> <p>(1) 年度当初に受講者と実習担当教員を決定し、連携協力校と打ち合わせを行う。</p> <p>(2) 随時協議を行い実習の研究テーマと方法を定める。</p> <p>(3) 実習開始2週間前に連携協力校に受講者と実習担当教員が連絡をとり、学校支援フィールドワーク個別計画表を提出、打ち合わせを行う。</p> <p>(4) 実習終了後、実習担当教員が連携協力校と連絡をとり、実施状況について意見を求める。</p> <p>(5) 具体的には、週2日を連携協力校での実習を行い、3日間は分析と実践の準備にあたるようなパターンから、週5日の実習を行い、間に2週間程度の学校支援リフレクションの期間をおいて後半を行うパターンなどによる。</p>	<p>独立方式</p> <p>若井彌一 小林辰至 西川 純 松本 修 木村吉彦 藤田武志 岩崎 浩 朝倉啓爾 林 泰成 武嶋俊行 瀬戸 健 廣瀬裕一 松沢要一 水落芳明 赤坂真二 久保田善彦</p>

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
実習科目	学校支援フィールドワークⅠ（現職）	<p>1年次に連携協力校において履修する実習科目である。指導的立場の教員を育成するため、学校において学校の授業・教育研究を支援したり、教育実習生の実習を実習校教諭とチームティーチング等を組みながら支援する実習を中心に実習し、教育実践リーダー及び学校運営リーダーとしての子ども理解に基づいて即応力（授業計画力、授業指導力、授業分析力を含む。）を培う。</p> <p>なお、授業は、複数の教員が独立して授業を担当する独立方式で行う。 学校支援フィールドワークの実施については、次の流れで行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 年度当初に受講者と実習担当教員を決定し、連携協力校と打ち合わせを行う。 (2) 随時協議を行い実習の研究テーマと方法を定める。 (3) 実習開始2週間前に連携協力校に受講者と実習担当教員が連絡をとり、学校支援フィールドワーク個別計画表を提出、打ち合わせを行う。 (4) 実習終了後、実習担当教員が連携協力校と連絡をとり、実施状況について意見を求める。 (5) 具体的には、週2日を連携協力校での実習を行い、3日間は分析と実践の準備にあたるようなパターンから、週5日の実習を行い、間に2週間程度の学校支援リフレクションの期間をおいて後半を行うパターンなどによる。 	<p>独立方式</p> <p>若井彌一 小林辰至 西川 純 松本 修 木村吉彦 藤田武志 岩崎 浩 朝倉啓爾 林 泰成 武嶋俊行 瀬戸 健 廣瀬裕一 松沢要一 水落芳明 赤坂真二 久保田善彦</p>
	学校支援フィールドワークⅡ（現職）	<p>2年次に連携協力校において履修する実習科目である。この科目は「学校支援フィールドワークⅠ（現職）」を踏まえて、引き続き継続し、指導的立場の教員を育成するため、学校において学校の授業・教育研究を支援したり、教育実習生の実習を実習校教諭とチームティーチング等を組みながら支援する実習を中心に実習し、教育実践リーダー及び学校運営リーダーとしての子ども理解に基づいて即応力（授業計画力、授業指導力、授業分析力を含む。）を培う。</p> <p>なお、授業は、複数の教員が独立して授業を担当する独立方式で行う。 学校支援フィールドワークの実施については、次の流れで行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 年度当初に受講者と実習担当教員を決定し、連携協力校と打ち合わせを行う。 (2) 随時協議を行い実習の研究テーマと方法を定める。 (3) 実習開始2週間前に連携協力校に受講者と実習担当教員が連絡をとり、学校支援フィールドワーク個別計画表を提出、打ち合わせを行う。 (4) 実習終了後、実習担当教員が連携協力校と連絡をとり、実施状況について意見を求める。 (5) 具体的には、週2日を連携協力校での実習を行い、3日間は分析と実践の準備にあたるようなパターンから、週5日の実習を行い、間に2週間程度の学校支援リフレクションの期間をおいて後半を行うパターンなどによる。 	<p>独立方式</p> <p>若井彌一 小林辰至 西川 純 松本 修 木村吉彦 藤田武志 岩崎 浩 朝倉啓爾 林 泰成 武嶋俊行 瀬戸 健 廣瀬裕一 松沢要一 水落芳明 赤坂真二 久保田善彦</p>
	学校支援フィールドワークⅠ（特別）	<p>1年次に連携協力校において履修する実習科目である。指導的立場の教員を育成するため、学校において学校の授業・教育研究を支援したり、教育実習生の実習を実習校教諭とチームティーチング等を組みながら支援する実習を中心に実習し、教育実践リーダー及び学校運営リーダーとしての子ども理解に基づいて即応力（授業計画力、授業指導力、授業分析力を含む。）を培う。</p> <p>なお、授業は、複数の教員が独立して授業を担当する独立方式で行う。 学校支援フィールドワークの実施については、次の流れで行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 年度当初に受講者と実習担当教員を決定し、連携協力校と打ち合わせを行う。 (2) 随時協議を行い実習の研究テーマと方法を定める。 (3) 実習開始2週間前に連携協力校に受講者と実習担当教員が連絡をとり、学校支援フィールドワーク個別計画表を提出、打ち合わせを行う。 (4) 実習終了後、実習担当教員が連携協力校と連絡をとり、実施状況について意見を求める。 (5) 具体的には、週2日を連携協力校での実習を行い、3日間は分析と実践の準備にあたるようなパターンから、週5日の実習を行い、間に2週間程度の学校支援リフレクションの期間をおいて後半を行うパターンなどによる。 	<p>独立方式</p> <p>若井彌一 小林辰至 西川 純 松本 修 木村吉彦 藤田武志 岩崎 浩 朝倉啓爾 林 泰成 武嶋俊行 瀬戸 健 廣瀬裕一 松沢要一 水落芳明 赤坂真二 久保田善彦</p>

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
実習科目	学校支援フィールドワークⅡ（特別）	<p>2年次に連携協力校において履修する実習科目である。この科目は「学校支援フィールドワークⅠ（特別）」を踏まえて、引き続き継続し、指導的立場の教員を育成するため、学校において学校の授業・教育研究を支援したり、教育実習生の実習を実習校教諭とチームティーチング等を組みながら支援する実習を中心に実習し、教育実践リーダー及び学校運営リーダーとしての子ども理解に基づいて即応力（授業計画力、授業指導力、授業分析力を含む。）を培う。</p> <p>なお、授業は、複数の教員が独立して授業を担当する独立方式で行う。 学校支援フィールドワークの実施については、次の流れで行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 年度当初に受講者と実習担当教員を決定し、連携協力校と打ち合わせを行う。 (2) 随時協議を行い実習の研究テーマと方法を定める。 (3) 実習開始2週間前に連携協力校に受講者と実習担当教員が連絡をとり、学校支援フィールドワーク個別計画表を提出、打ち合わせを行う。 (4) 実習終了後、実習担当教員が連携協力校と連絡をとり、実施状況について意見を求める。 (5) 具体的には、週2日を連携協力校での実習を行い、3日間は分析と実践の準備にあたるようなパターンから、週5日の実習を行い、間に2週間程度の学校支援リフレクションの期間をおいて後半を行うパターンなどによる。 	<p>独立方式</p> <p>若井彌一 小林辰至 西川 純 松本 修 木村吉彦 藤田武志 岩崎 浩 朝倉啓爾 林 泰成 武嶋俊行 瀬戸 健 廣瀬裕一 松沢要一 水落芳明 赤坂真二 久保田善彦</p>